

次の世代に「在宅ホスピスケア」を伝えるための絵本

いびらのすむ家

在宅ホスピスケア振興ために不可欠な課題として、「在宅ホスピスケアを次世代に伝える」があります。病院の機能分化のために、急性期をすぎた患者さんは転院か帰宅を求められ、それをよりスムーズに行うために、さまざまな制度改革や環境整備が進められています。そこで忘れてならないのが、次の世代を担う若い人々に在宅ホスピスケアを伝えることではないでしょうか。ところが、現実には極めて手薄と言って過言ではないのが、現実です。そこに一助することを目的として制作したものが、この絵本です。

< 内 容 >

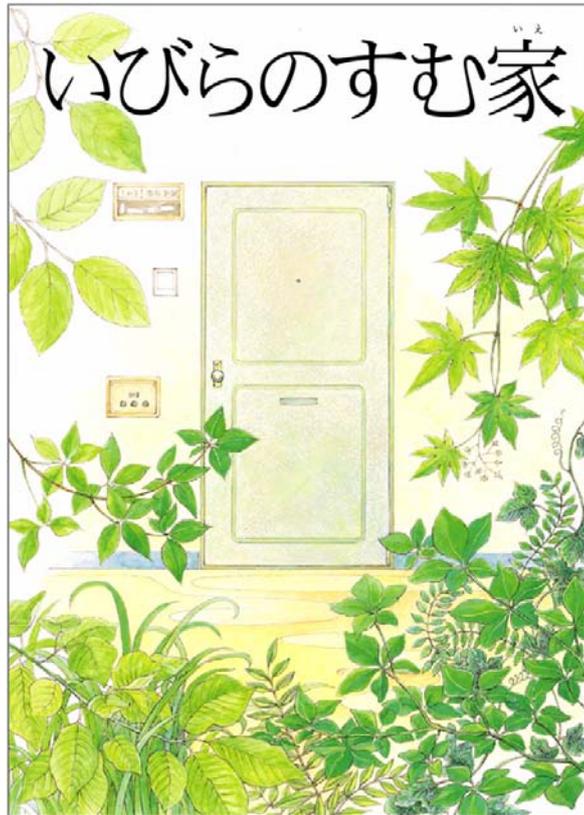
申請時のテーマ 在宅ホスピスケアを低年齢層(小学校高学年～中学生)に紹介する冊子形態の絵本制作とその配布

絵本の題名 いびらのすむ家

絵本の概要 仕上がりB5サイズ・4C・中綴じ・32ページ
実話をもとにした家での看とりの紹介。若い世代にも知ってほしい在宅医療に係わる用語類の紹介とその説明(リビングウィル、死亡診断書等)男性介護者たちの介護情景(核家族化に伴い、従来の男女役割分担にとられない介護、すなわち「男の介護」が必然となっておりますが、それにも触れるものとなっております)。

制 作 者 絵と構成：吉田 恵子
(アートディレクター：夫を施設ホスピスで看取った経験者)
文：吉田 利康
(エッセイスト：妻を家で看取った経験者)

物語の素材 実話(可能なかぎり忠実に描写を心がけた)



< 登場人物 >

勇太(13 歳 中学生) 剛太(勇太の兄 : 大学生)
母(白血病患者 50 歳) 父(サラリーマン 50 歳)
在宅医(比較的若い医者)

< 絵 > 古いマンションの扉と植物

< 留意点 > 五月の新緑のイメージから、いのちの息づかいを表現したかった。

< 絵と構成 : 全体の留意点 >

ストーリー

実話を基調にしなが、シチュエーションは空想のものにしようか(動物が主人公など)とも考えたが、実体験そのままを伝えることほど、読者に訴える力が強いものはないと決断し、その時の会話、ことば、心情、身につけていたもの、座っていたソファ、間取り、登場人物の雰囲気など、できるかぎり事実
に忠実に描く努力をした。

絵のタッチ

柔らかさと安心感を出すため、線画に淡彩着色。

登場人物の描写

物語の客観性を保持するために、読者と物語の間に距離をおくことを心がけた。そのために、人物のアップ描写はなるべく避け、キャラクター性を強く出さないようにした。

構成

全体のストーリー展開に合わせて、紙面の白の空間を大事にし、配置、着彩の密度、配色などに強弱をつけた。

< あらすじと絵の留意点 >

(1)発病

朝から病院へ行った母は、夕方になっても帰ってこない。勇太は、鬼のいぬ間に洗濯とばかり、テレビゲームに熱中する。父が帰り、カツ井屋さんに行こうと勇太を誘う。物語は、そこから始まる。

< 絵 >

P1~ 2 : 夕暮れ時の町を、自転車で走る親子の姿。
少し肌寒くなった秋

< 留意点 >

勇太の家族が暮らす、いつもの町の風景を描く。
印象が、暗くならないように、明るすぎないように。



P1~ 2

(2)病人と家族

母は、白血病だった。2ヶ月の入院が必要と知らされる。そんなある日、勇太はおなかが痛くなり学校を早引け。診察した医師は、心労が原因する自律神経失調症という。

2ヶ月と言われていた入院だったが、4ヶ月がたち、その後も入退院をくり返し、やがて1年になる。そして、同じ季節が巡ってきたころ、久しぶりに病院へ面会に行った勇太は、交通事故にあう。



P3~ 4



P8



P7(一部)

< 絵 >

P3: 母の靴がない玄関 P4: いつもの夜の景色

P5~ 6: 道を歩く勇太と父

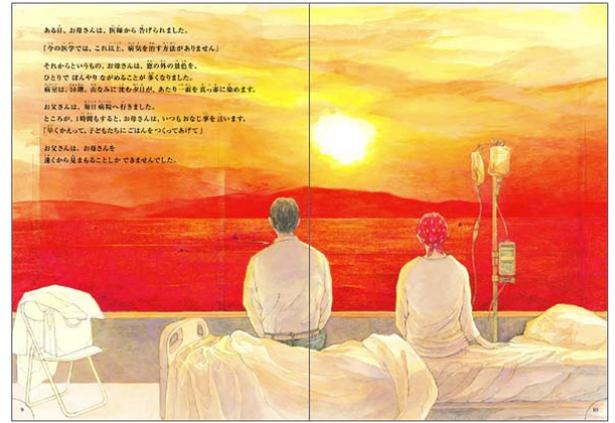
P7: 春夏秋冬 P8: 交通事故にあった勇太の自転車

< 留意点 >

母の発病を境に、家族の生活は一変する。
家族の心情、緊張感、時の流れなどを、季節感を織り交ぜながら、表現できればと思った。

(3)余命告知

秋が過ぎ、冬になる。そして、もう少しで春になろうとする頃、母は余命告知を受けた。それから一ヶ月ほど経ったころ、母の表情にいつものささが少し戻ってきた。安心したのか、父の精神状態が、限界に近い状態となる。遂に、病室の妻の前で、ベソをかいてしまう。そんな夫を励ましたのは、死と向きあっている妻だった。夫が正直な姿を見せたからだろうか、妻は「家に帰ってもいいだろうか」と夫にたずねた。



P9~ 10

< 絵 >

P9~ 10: 真っ赤に染まる夕日を見つめる2人
P11~ 12: 苦悩する父。窓の外を見つめる母

< 留意点 >

自分がその場にいることをイメージして描いた。



P11(一部)

(4)在宅ホスピスケアの準備

在宅療養への移行が決まったとたん、打ち合わせもないのに、家族各自、連携のとれた動きをするようになる。そして、帰宅の受け入れ準備は整っていった。ところが、困ったことに在宅医が見つからない。かかりつけ医に訪問診療を断られ、新たに医者を探すが見つからない。でも、母の帰宅がうれしい。それが原動力となり、家族は、様々な課題を乗り越えていく。「男の介護」の始まりだ。



P13~ 14



< 絵 > P13~ 14: 家の掃除をする家族

< 留意点 > さりげなく、軽快に。

(5)在宅ホスピスケアの開始

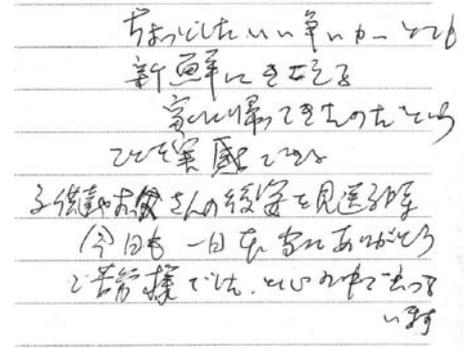
五月の緑が美しい季節に、母は家に帰った。久しぶりの家はよかった。痛みのため、病院では眠れなかった母だったのに、家に帰るとたん寝てしまった。のどを通らなかった食事だったのに、ラーメンをたいらげた。以前は、剛太の長電話、勇太のテレビゲーム、お父さんの歯ざしりや寝言などうるさいだけだったものが、心地よく感じられる。これが家効果なのだろうか。

病気にならなかつたら、このような世界に気づくこともなかったと、母は手帳に「ちょっとした言い争いがとても新鮮に聞こえる。家に帰ってきたことが実感できる」と、感謝の思いを綴った。

いびらとは、暮らしに内在する、そうした力の総称である。換言すれば、「暮らしというケアシステム」であり、人はその力に生かされているのである。



P16



P18: 実際に書かれたお母さんの手記



P17



P19~ 20



P23~ 24

< 絵 > P15: 家に帰るなり、ソファで寝てしまった母を見つめる父 P16: やっとそろった家族の靴

P17: 以前のようにみんなを見送る母 P18: ベランダの植物に水をあげる母

P19~ 20: 温泉に行きたいと言い出す母と家族たち

P21~ 22: 五月の透き通った青い空 P23~ 24: 五月の緑。山道を散策する家族

< 留意点 > 家族一人一人のその時の気持ちを想像しながら、表情、しぐさ、視線を大事に描いた。

(6)旅立ち

帰宅から10日が過ぎたころから、母は急に弱りはじめた。13歳だった勇太は、もう15歳になっていた。看護師さんと一緒に、母の傷口の手当もした。つらかったけど逃げなかった。入院では、なかなか体験できないことである。

せん妄が始まり、お母さんは変なことを言い出した。その姿を、勇太も剛太も、そばで一部始終見ていた。旅立ちが近いと知らせる医師に、「そんなに病気が悪いのに、なぜ、なにもしないのか」と、疑問をぶつける長男の剛太。「お母さんの意志を尊重するため」と説明する在宅医。母はリビングウィルを持っていた。枕元には、必要最低限の飲み薬と、氷枕と体温計と血圧計しかなかった。

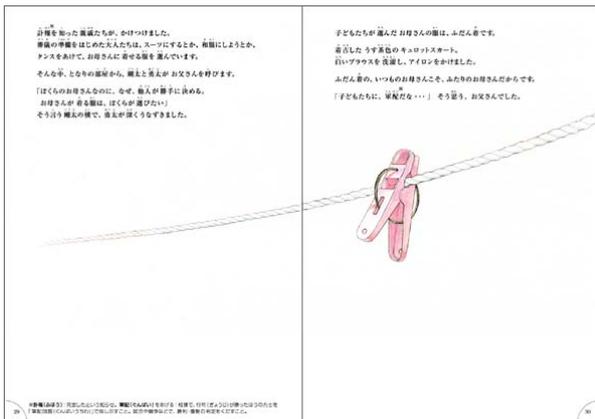
母の旅立ちの服装は、勇太と剛太が選んだ。それは母が普段よく着ていた白いブラウスと、少し色あせたベージュのスカートだった。



P27~ 28



P25



P29~ 30

<絵> P25: 氷枕と体温計 P26: 外から見た家の中 P27~ 28: しずくに映った風景 P29~ 30: 洗濯ばさみ

<留意点> 後半部分は、あまり多くのものを描く必要はないと感じた。

最終ページは、いつもは見過ごしてしまう、日常の何気ない小さなものに焦点を当てて描写。